



西日本新聞 文化欄

1988年九月二十六日～十月八日

振り返らずにひたすら前進

「女ピカソになる」

田部光子は九州派の会計係だった。「お金を男にまかせると飲んでしまうから」だったとはいって、九州派結成の三十二年当時はまだ二十代前半。大役だった。会合の度に殴り合いをする荒くれ男たちから会費を集めるので。「初め月千円、確かすぐ値上げしたはず」。岩田屋デパートに勤めていた田部の月給が五、六千円だったから、かなりの高額である。東京展の時は一万円徴収したこともある。皆、貧しかった。「全員が払えたことは一度もなかったけど、だれかが帳尻を合わせていた」と言い、さほど苦もなく大役をこなしたようだ。

生来のものか、九州派で鍛えられたからか、すさまじいバイタリティーの持ち主。九州派以後も新しいグループを結成したり貸画廊を経営するなどひたすら動き回った。「組織としての九州派には懐かしさは覚えない。良い絵を描いて女ピカソになる」。あっけらかんと言ってのけ、ひたすら前に進む。

嘉門に評価されて

「九州派に入ってなきや、安井賞の二度、三度は取つとる」と冗談交じりに笑う。このバイタリティーを支えているのは、絵に対する自信だ。

昭和三十四、三十五年と西部女性美術展で連続受賞。三十四年の自由美術展評(産業経済新聞)で美術評論家の嘉門安雄が「中心会員以外では、中本達也と石橋光子が確実に

伸びてきている」と書いた。石橋は田部の旧姓である。「これで人生、間違えたねえ。絵は簡単と思ってしまった」と苦笑いするが、一流評論家のたった一行の評が若い女性に自信を植え付けた。九州派に洗脳されて「公募展粉碎」と叫ぶようになるのは皮肉だが、ともかく画家になった。

三十三年に結婚。妊娠五力月の時、腹帯の上に九州派の軍資金を巻いて東京展に出かけたその気丈夫さで、二人の男児を育てながら九州派展に出品を続ける。四十年の最後の九州派展にベニヤ板六枚の大作を出すが「四日間徹夜して死にかけた」という。シンナーで筆を洗っていると手足が動かなくなつた。抗生物質を注射され、意識が薄れたといふ。

「良か絵を描かな!」

七〇年安保、反万博、学園紛争と揺れ動いた六〇年代末だったが、七〇年代に入ると何事もなかつたように世の中は平静に戻り、高度経済成長はピークを迎えた。

「燃えない若者が増え、しらけの時代がきた。これではいかん、なんとかしなければと思った」。タブロー(額縁付きの絵)を拒否した九州派みたいな先鋭的なものでなく、仲良くやろう」と一種のサロンを目指した。ところが、第一回展が小品が全部売れ、ジャーナリズムの注目を浴び盛況で、にわかに欲が出た。勉強会を始め、年一回、展覧会を重ねるごとに、激烈な相互批評をするようになる。

「良か絵を描かな!」と叫ぶリーダー田部の胸の内に、かつての九州派の運動がよぎらなかつただろうか。メンバーが増えて、会場は当時の福岡県文化会館や福岡市美術館へと移った。

五十五年の第八回展から公募制にした。賞金も出した。

「数を増やせば力になる」という田部の考えは九州派の大衆路線につながる。が、自分たちが審査をすることにためらうメンバーとの間に亀裂が生じて、五十九年に解散する。だが十一年間も自主運営で展覧会を開けたのは、田部の強力な指導力に負うところが大きい。

切手代で国際交流

五十六年には福岡県文化会館で地球芸術郵便局展を開いた。世界各地に郵便で呼びかけ、二十二カ国から約二千点のメール・アートを集めた。昨年、福岡市美術館での第二回展では三十カ国、約三千点。局長の田部は「切手代だけで世界の芸術家と交流できる。平和運動よ」と胸を張り、三回展の構想を練っている。

九州派では性や政治を主題に強烈なオブジェを作った田部だが、このところ板に幻想的な心象風景を描いている。彫刻刀による無残な削り跡にそのころのオブジェの痕跡がないとは言えないが、むしろ華麗さを引きたてるものようだ。「すごいのある美しい絵を描きたい。全く一人きりになって、どのくらいの絵が描けるか挑戦する。一

回しかない人生やもんね」。ただ ひたすらに絵だけに目を向けている。

(13)

1988年(昭和63年)10月1日

土器四

これは一度もなかつたけど
だれかが競りを合わせてい
た」と言い、さほど苦もなく
大役をなしうつた。
生糸のものか、九州派で最
えられたからか、すさまじい
バイタリティーの持主。九

「お前が入ったときや、
　　薦めするが、一流評論家の足
　　並みの度、三度は取つと
　　たたう一行の評がい女性に質
　　問をながめたりして、こ
　　のハイドリミーをもつて、
　　おは、絶対に『魔術』
　　叫ぶようになるのは皮肉だ
　　が、ともかく画家になつた
　　粉

ひたすら前進

振り返らずに

九州派から四半世紀

前衛
たの軌跡

〈4〉

田部 光子

〈福岡市〉

三十三年に結婚。妊娠五九



アトリエで原稿を書くことが多い田部光子さん

州派みたいな先鋭的なもので、館で地球芸術館便局展を開いた。世界各地に順便で呼び込んだ。その翌年を自指した。ところが、第一回は小品が金賞となり、シャーリースの画室を出て、沿び盛況で、にわかに欲が出た。勉強会を始め、年一回、展覧会を重ねるなどして、激烈な相互批評をするついで、平和運動」と胸を張り、三回の構想を纏っている。

「良か絵を描かなく」と叫ぶリーダー田部の胸の内には、かつての九州派の運動がよみがえった。だから、この田部は幻灯劇的な心風雲を描いている。

一が増えて、会場は毎年の福岡文化会館や福岡市美術館へと移った。

五十五年の第八回展から公募制にした。賞金も出した。「数を増やすばかりになる」という田部の考は九州派の大衆路線につながるが、自分が描けるが才能する。一回しか描けない人生やもん。たったすらに絵だけに目を向けて、ひたすらに絵だけに目を向けて、生じて五十五年間で解散する。だが十一年間も自主運営で展覧会を開いたのは、田部の強力な指導力に負うところが大きい。

（吉田浩記者）

九州派展 ◇ ◇ ◇

市中央区大濠公園、福岡市美術館 10日まで、福岡市美術館 3日は休館。